

特集にあたって

明智龍男*

怒りは人にとって普遍的な感情であり、心理学者の Paul Ekman によると、恐れ、喜び、悲しみ、驚き、嫌悪と合わせて基本感情の一つとされている。実際に、私たちも日常的に怒りを感じ、時には怒りのコントロールに苦悩することもある。怒りそのものは疾患単位ではないものの、感情の一つであるため、脳機能や気分に関連して、医療現場でその評価やマネジメントに悩むことは日常的にみられることでもある。実際に、医療現場で仕事をしている人たちの中で患者さんやご家族の怒りで悩んだ経験を持たない方はいないのではないだろうか。

筆者は精神科医として、がん患者をはじめとした身体疾患患者のメンタルヘルスを専門にしてきたが、その経験の中でも実に多くの怒りに出会い、悩んできた。また、日常的に看護スタッフから怒りを有した患者さんやご家族のケアや対応の相談を経験してきた。その経験からは、怒りには正常心理の範疇のものから、脳器質的なものまで、あらゆる病態に起因するものが含まれていた。怒りは暴言や暴力につながることもあり、医療スタッフのメンタルヘルスの維持あるいは医療安全の観点からも重要なテーマである。

怒りを有した患者さんやご家族に接する際には、注意深い観察および評価と、場合によっては高度なコミュニケーション・スキルが求められる。もちろんその原因によっては薬物療法が必要となることもある。それでは、怒りを有した患者さんやご家族を前に、具体的に私たちはどのようにその状態を評価し、またどのようにマネジメントすればよいのであろうか？ また激しい怒りを持った患者さんやご家族に対して医療安全上の観点からは、どのような対策を講ずるべきなのであろうか？

精神科医療に限らず、広く医療現場において、患者さんやご家族の多様な怒りの評価や対応に悩む医療現場の方への一助となることを願って、本特集を企画した。

* 名古屋市立大学大学院医学研究科精神・認知・行動医学分野 (〒467-8601 愛知県名古屋市瑞穂区瑞穂町字川澄 1)